

1・彷徨^{さまよ}う幼女

夜の通りに、私は一人立っている。
通りと言っても、私が立っているところに人の姿はほとんど無い。

細いこの通りは大通りに繋がっていて、そちらは沢山の人々が行き来する繁華街。また反対側へ進めば、繁華街ほど人はいないがここよりはまだ人の多い通りに出る。ただそちらは、ほとんどが男女二人連ればかり。道々、二時間だけ部屋を貸し与える「宿」が立ち並び、そんな通り。

私が立つこの通りは、大通りからその宿々へと繋がる裏道。煌びやかな繁華街のような明かりはもちろん、ホテル街特有と言える看板の明かりすら無い。ここには双方の明かりがどうにか届くという、そんな薄暗い裏道。

普通ならこんな裏道、誰も通らない。宿に行く道はいくつもあり、わざわざ細く暗いこの道を選んで行かない。カップル達にしても、こんな道を通ってしまうえば盛り上がった気分も萎えてしまうというもの。

それでもたまに、この道にわざわざ足を踏み入れる人がいる。

「お嬢ちゃん……こんな所にいると、あぶないよ？」

優しく、私に声をかける大人。男の人だ。有り体な、何処にでもいるようなサラリーマン風の男。

優しく？ 違うわね。けして優しくなんかは無い。私には解る。

「ここに立っていると、気持ちいいことをしてくれる人が来るって聞いたけど……おじさんは違うの？」

男の顔が、驚きと、そして期待に満ちあふれ、口元はニヤリとつり上がっていく。

まさかこんな子供が……しかしここに立っているということは……最初に声をかけた時の、この男が考えた心境。たぶん間違っていない。少なくとも私の言葉を聞いた瞬間の、あの顔。あの顔からは間違っていないと判断出来る。

そう、ここは時折援交目的の女性が客待ちすると言われている通り。本来ならもつと明るいところで堂々と客待ちをするものだが、最近は警官の見回りが厳しくなっただけでなくヤクザの介入もあつたりして表通りではやり辛い。「もぐり」で援交する私なんかには、噂の広がったこの手の通りを点々とする方が客が捕まりやすい。

客？ 違うわね。少なくとも、私にとって相手は客ではない。

「驚いたな……キミ、いくつなんだい？ 大丈夫なの？」

何が「大丈夫」なのか、そこを尋ねるのは野暮。

「いいじゃない。それより、おじさんは気持ちいい事してくれないの？」

年齢を答えるのも野暮。私はぐっと男の腕を両手で掴み、抱きしめるように引き寄せる。まるで無邪気な少女のように。まあ、客観的に見れば私の行動は年相応の態度に見えるだ

ろう。

ここでの会話は、極力必要外のことを話すべきではない。何故ならば、もし何かあった時に「知らなかった」で押し通せるから。

それに……「本当の」年齢を聞いたって、信じはしないから。

重要なのは、この男が私を自分の好みに応じた年齢へ勝手に当てはめてくれる事。そして私は間違いなく、この男にとって好みの年齢と思われる外見をしている。

ロリコン。男の好みを一言で言えば、それ。

黒いフリルの付いた、いわゆる「ゴスロリ」と呼ばれるに近い幼児服を身にまとい、長い黒髪をツインテールに結んでいる。どこからどう見てもその手の趣味を持つ男性に「うけ」が良い格好だ。唯一唇が真っ赤なところは年相応とは見えないが、そこはむしろエロティシズムを刺激するワンポイントだと私は自己解釈している。

私の、ほんの僅かだけ膨らんだ胸を腕にぐいぐいと押し当てられ、男は鼻の下をだらしなく伸ばしきっている。

「そうか、じゃあおじさんが良い所へ連れて行ってあげるよ」

ちよろい。ちよつと古くさい言葉を脳裏に浮かべ、私は心中で舌を出す。

ここは狩り場。

この細い通りは、大通りから時折折れ込んでくる「ネギを背負った鴨」を手慣れた「猟師」が捕獲する、狩り場。私は見事、一匹の鴨を捕獲することが出来た。後は、どう美味しく「食べさせる」か。それだけ。

私は男に連れられ、「良い所」の並ぶ通りへとつま先を向けた。

日本は私にとって、とても住み心地の良い国。何故なら、この国は私のような「年端もいかぬ幼女」を愛でる大人が多いから。むしろこの国でも、未成年者に対する性行為は御法度。それでも、様々な形で幼女を愛でる大人は絶えない。

国民性なのかどうか、難しいことは私には解らないが、モンゴルからわざわざやってきただけの「報酬」を、この国の男達は私に与えてくれる。

そう、私はモンゴル出身。ロシア側に近いブリヤート人の住む地区で生まれた。とはいえ、そこを故郷だと思ったことは一度もなく、日本に来たのも出稼ぎではなく移住に近い。私にとっては、ただ「獲物」が多い狩り場へと拠点を移したに過ぎない。日本という国が、私にとって最良の狩り場だという、ただそれだけの事。

「ね、一緒にお風呂入る」

私を宿へと連れ込んだだけで既に興奮している男に、私は部屋へ入るなり風呂へと誘った。

経験上、幼女を愛でる男達は女性をリードするのが苦手だということを、私は知っている。もちろん中には女性の扱いが上手い男もいるが、しかし私から誘った方が「効果」があるのは変わらない。それに私は女性と呼ばれるほど大人とは思われていない。幼い女の子を大人の男が扱うのは、それだけで十分に難しいものだろう。

可愛らしく、かつ、大胆に。

幼女を好む男達が求める、理想像。それを私は出来る限り演じてみせる。

「うっ、うん。そうだね。ちゃんとキレイキレイしようか」

私を何歳だと思っているのやら。一步間違えれば赤ちゃん言葉になりそうな甘ったるい言葉で、男は私の提案に賛同した。

私は軽くはしゃぎながら、脱衣場へと駆ける。男よりも先に服を脱ぎ、風呂場へと入る為。着替えているところを見せてやっても良いのだが、私は自分の「脚本」通りに男を誘導する為、先に入る必要があった。手早く服を脱ぎ脱衣場に置かれたかごへ入れる。そして下着も脱ぎ、こちらは少しかこの縁に引掛かけていれる。

わざとらしいくらいに、下着が目立つように。

案の定、遅れて脱衣場に来た男は、私の「畏」にかかる。風呂場の中から扉の曇りガラス越しに見ても解る。男が私の下着を手を取っている。そして少し広げてみたり顔に近づけてみたりと、定番の行動。男が徐々に気分を高めている間、私は湯を溜めながら石けんを泡立てる。

「遅いよお、何してたの？」

解っていないながら、私は少しすねてみせる。男はゴメンゴメンと謝りながら、チラチラと私の身体を見ている。私は石鹸の泡で、胸や腰を隠している。すぐに全ては見せない。チラリズム……などと言うそうだけれど、私は言葉こそ知っていてもその真理状況はよく解らない。ただ、男の食いつきが変わるのを経験上で知り得ているだけ。

「ね、背中洗ってよ」

よく泡だったスポンジを、ハイと男の前に突き出す。男がそれを受け取ったのを確認すると、私はすぐにクルリと背を向けた。じつくりと見せる隙は与えない。それもあるが、男に「チャンス」を与える「口実」にもなる。

有り体に言えば、誘っている。

しばらくは大人しく、背中を洗う男。小さい背中も、もう十分に洗われている。それでも私は、男の手を止めさせない。もうほとんど動きの無い手は、男の迷いを象徴しているから。

「……あん！ もう、どこ触ってるのよお」

「ごめんごめん。手が滑っちゃった」

わざとらしい謝罪をしながらも、男の手は「滑った」まま、私の胸を鷲掴みにしている。鷲掴みとは少々表現が大げさかもしれない。私の胸は、掴む程膨らんではないから。男の手は、そのまま私の胸を軽く揉みだす。しばらくしてその手は胸から軽く離れ、小さなふくらみの中でも、特に突き出た二つの突起を、指の先で軽くくすぐるようになって回す。

「んっ……そこ、気持ちいい」

ただ指先を軽く揺するだけ。テクニクとしてはそう上手いものではない。それでも私は、声を出し快楽を楽しむ。テクニクが低級でも、気持ちいい刺激になっているのは間違いないのだから、何も無い状況で演技をするよりはやりやすい。

「いいよ……感じちゃう」

気を良くしたのか、しつこいくらいに続く、単調な攻め。さすがに同じ事ばかりが続くのも、飽きる。刺激はあるが、徐々に快楽からは遠のいてしまう。さてどうするか。もう「次」に進んで欲しいのだが、それをおねだりして良いのかどうか。甘えるおねだりは効果がある。それは解っているが、遣いどころを間違えると落ち込ませてしまうこともある。

今の場合、テクニクの無さを指摘することになりはしないかと判断に悩む。

「ちよっ……やん！　そこ……はっ！」

こちらの危惧をよそに、男は「次」へと進んでくれた。片方の手が、胸から離れ下へと伸びた。産毛も生えぬ、女性の秘所へと伸びた手。胸同様に僅かだけ盛り上がったその秘所を、その手がなで回す。手が触れたのを感じた瞬間、私は大げさに背を反った。

「はぁ……あん！　いいよ……」

手で軽くなで続けた男はその手を止め、中指だけを軽く動かす。秘所の中心。指が軽く埋まりそうな割れ目を、奥の方からゆっくりと、なで上げる。

「そこ、そこ！　すごい、感じるよぉ！」

なで上げた指が、突起に当たる。未だに胸の突起をいじり続けている指同様、秘所の突起も軽く、しかし細かく、震えるように撫でる。

「はぁ……んっ、お兄ちゃんばかりずるいい。私もぉ」

初めて言った、私の「お兄ちゃん」という単語に反応する男。軽い戸惑いと興奮の隙をつき、私はクルリと男の背に回った。

「えへへ。なんだか、お兄ちゃんって呼びたくなったの。いや？」

男の攻めから逃れた私の行為に疑問を感じさせる前に、「お兄ちゃん」と甘えてその疑問を反らさせる。男はむろん、お兄ちゃんと呼ばれることに抵抗はない。むしろ望んでいた。おじさんと呼ばれるよりお兄ちゃんと呼ばれる方が嬉しいのは当たり前だろうし、なにより、幼女から率先して呼ばれるなら男にとって至福となる。

正直、どうしてそこまで名称にこだわるのかはよく解らない。なんでも、日本語で「萌え」という言葉がありそれに該当するらしいのだが、モンゴルには無い感覚。理解しづらいが、しかし効果は絶大なので私はこの手をよく使っている。

「ありがとう」

軽く頬にキス。

「じゃ、背中洗ってくれたお礼。お兄ちゃんだって、気持ち良くならなきゃダメだよ」

泡だらけの身体を、男の背中に密着させる。

「んっ……どう？」

身体を上下させ、全身で背中を洗う。さしてふくらみの無い胸では、男としても感触による快楽はあまり望めない。しかし幼女が自分の為に、懸命に身体を使い奉仕しているという行為が、精神に快楽を与えていく。

「そしてこれは、さっきのお返し」

イタズラっぽく言いだし、私は短い腕を懸命に下へと伸ばす。背中越しからでは、手が届かない。それを「演出」した後に、私はすこし身体をずらして片腕だけを男の秘所へと伸ばす。

「すごい……熱くつておつきい」

掴んだ肉棒は、片手では納まらない。だが私の手は幼女の手。納まらなくて当然。もし私が成人の身体をしていたら納まったかもしれない。

「どう？　お兄ちゃん」

ただ闇雲に、握った物を上下に擦り上げる。テクニクとしては男の事を言えるほど上手い物ではない。だがここで手慣れた技を見せては、むしろ男に疑心を生ませてしまう。

そもそもあの通りで獲物を待つていたような女なのだから、手慣れていて不思議はないが、それでも「不慣れながら一生懸命な妹」を演出した方が喜ばれる。幼女を買っておいて純情を求めるのもおかしい話だが、それが「男の夢」「萌え」というものらしい。

時折、どうしても人間の考えることで理解出来ないものがある。理屈ではない、と言う人間もいたが、ならなおのこと私では理解出来ない。それは、私が「愛」を知らないからだという人間もいた。「男の夢」や「萌え」も「愛」なのか？ どうも違う気がする。ただ、自分の欲望を具現化しようとしているだけではないか。そう私は認識しているからこそ、演出しやすいしそれが射ていると確信している。事実、今私に快樂の棒を擦られている男は、たいしたテクニクでもないのに至福の表情を浮かべているではないか。

「もっ、もういいよ……充分だから」

うわずつた声で、男が私の奉仕を止める。だが何処まで本気なのか、言葉だけでまだ私の行為を止めようと動いてはいない。

「じゃ、続きはベッドでね」

私はあつさりと手を放す。代わりに、また頬に軽くキス。体も心も、高ぶらせたまま寸止め。自分で言い出したこととはいえこれは男にとって辛い状況。その辛さは、ベッドでの行為に繋がっていくはず。男の心から理性をはぎ取り野生を引き出すには良い。

溜めてあつた湯船を桶ですくい、さっと身体の泡を流す。そして来た時同様素早く風呂場を出る。もちろんこれも、男を定めたルールに乗せる為の誘導演出。

バスタオルを身体に巻き、私はベッドに腰掛けている。大人用のバスタオルは幼女の身体を持った私には大きく、胸や腰だけでなく脚までも隠すのに充分だった。

私はちょこんとベッドの縁に腰掛け、待ちきれない子供が暇を持て余すかのように足をばたつかせて男を待つ。脚を隠すバスタオルも、脚を動かすことでチラチラと見え隠れする。男の視線は、無邪気な幼女の姿と、その幼女が時折見せつける生足に釘付けられているはず。先ほどまではほとんど全裸という格好で、しかも身体を弄もてあそび弄ばれたばかりだというのに、ちらりとしか見えない生足にまた興奮している。

風呂場からずつといきり立たせていた肉棒が、衰えることなく熱を持ち続けている。それは男の腰に巻かれたバスタオル越しにでも良く解る。息も荒げに、男はつかつかとこちらへと迫ってきた。

「きゃっ！ ちょっ……もう、お兄ちゃん！」

いきなり、男は私の両肩を掴むと、そのまま押し倒した。それだけ、男の興奮は頂点に達し理性が効かなくなっているという事だろう。私はこれまでの誘導が上手くいつていることに胸の内ではくそ笑みながら、表では抗議の声を上げた。

「あつ、んっ……んん……」

抗議は上げさせないとばかりに、男は顔をぶつけるのかというほど勢いよく私の唇にむしゃぶりついた。のしかかったまま、小さく華奢な私の身体をぐっと抱きしめる男は、ただ無我夢中で唇を押しつけ舌を私の口内へと押し込む。それこそ息をするのも忘れるかのように。

風呂場での行為で解っていたが、やはり男にテクニクは皆無。快樂を得ると言うより

は、興奮を消化しようとしているようだ。

「ん……やつ、痛いよ、お兄ちゃん……」

どうにか一瞬唇が離れた隙をつき、私は首をイヤイヤと横に振りながら再び抗議を始めた。

「あつ……ごっ、ごめんね……」

痛い、という言葉に我を取り戻したのか、男はキツク身体を締め上げていた腕をほどき、慌てて上半身を起こした。

「もう……優しくしてよ、お兄ちゃん。ね？」

私は自分から、バスタオルを緩め、ゆっくりと広げた。露あらわになる、私の身体。男の呼吸がハアハアとますます荒くなっていく。その荒い息は、ゆっくりと下ろされた頭によって、胸へとかけられる。息に次いで、今度は湿ったなま暖かい舌が、胸に当てられる。

「あつ……」

私は軽く声を上げ、ピクリと身体を震わせた。一瞬男は、私の反応に驚き軽く顔を上げてこちらをのぞき見た。先ほどまでの荒々しい行為に対し優しくしてと抗議した私へ、気を使っているのだ。

いや、もう少し言えば、怯えているのだ。私に嫌われやしないかと。

臆病な男だ。私は思った。

これまでの行為を考えても、この男は女性に臆病なのがよく解る。だからこそ、自信の無い攻めも変化を付けられず、単調になる。そこまで臆病だからこそ、大人の女性は相手に出来ず相手にされないのだろう。そうやって、幼女を愛でる事へ逃避するのか……その過程に、私は興味など無い。だがそんな私でも、これくらいは安易に想像出来てしまう。むろん安易に想像出来る単純さが男という生き物なのだろうし、私にとって扱いやすくりやすいのだから何も問題はない。

さて、その扱いやすい男を、次へと進めさせなければ。私は不安げな男につこりと微笑んだ。私の笑顔に気をよくしたのか、男は舌先だけでなく唇ごと胸に押しつけ愛撫を始めた。チュパチュパと音を立てながら乳房に吸い付き、舌で何度も乳頭をなめ回す。

「あは……んっ、気持ちいいよ……」

未熟だとしても、吸われ舐め回されれば私にも少しは快樂が訪れる。人間の幼女ならば、まだ未発達達の身体を舐められても、くすぐりたいと感じる事はあっても快樂は得られないだろう。しかし私は、そんなごく普通の幼女ではない。人間の熟女並みに、私の身体は快樂を敏感に感知出来る。幼い身体に、熟女並みの反応。自分で言うのもおかしい話だけど、幼女好きの人間にとって私の身体はまさに理想の身体だろう。それを味わえるのだから、この男は幸せだ。

少なくとも、今は。

「ねえ……お兄ちゃんのも、舐めさせてえ」

甘えるように私はねだる。このままでは、また風呂場の時のように単調な攻めが続くだけになる。ならばそろそろ、私から攻めても問題ないだろう。興奮しきった男の頭では、幼女からの淫みだらな甘えも極々自然の行為だと錯覚してくれるだろうから。いや、幼女を愛でる思考の持ち主は、未経験の幼女でも淫らに甘えてくるものだ。既に錯覚しているのかもしれない。何にせよ、私からの奉仕提案に男は気を良くし、股を開き間抜けな姿を私の

前にさらした。私はちょこちょことうように男の股間ににじり寄り、ペロリと熱した棒を一舐めする。

「うっ」

男は軽く呻いた。まるでこれだけで達してしまうのかという勢いすら、短い呻きには含まれている。私は舌から男の顔を見上げ、微笑む。そして「あーん」とわざとらしく声を上げ、小さな口を精一杯広げる。なま暖かい感触が、口内に広がる。私は唇で力りを軽く啜え、ゆっくり顔を下げる。唇が棒の先端にまで達したところで、私は動きを止め、今度は反対に顔を押し込んでいく。けして唇を棒から離さない。そして啜えきれない肉棒の腹は小さな手で掴み、激しく擦る。上部のゆっくりとした感触と、下部の激しい摩擦。加えて時折舌で鈴口を軽く舐めたりもする。顔は出来るだけ上に上げ、上目遣いで男の顔をじつと眺め続ける。

もはや、幼女のテクニクではない。しかし興奮しきった男がそんな事に疑問など持つはずがない。

「んちゅ……美味しい……くちゅ……ちゅパツ」

味覚的にはさして美味しい物ではないが、「美味しい」と言えば喜ぶので言っている。ただ、人間の女性は本当に「美味しい」と思えることもあるらしい。そんな話を聞いたことがある。味覚的に美味しいのではなく、感情で美味しいと感じる。そういうものらしい。そこには、奉仕するという「行為」に対して感じる様々な感情と、奉仕したいと「思う」様々な感情によって美味しいと感じるらしいのだが……やはり、そこにも「愛」という要素は絡むらしい。

ならば、私はその感情や味覚を理解することはおそらく無いだろう。私にとって大切なのは、美味しい美味しいとしゃぶれば男が喜ぶ、という事だけ。

「うっ……もう、あつ、くう……」

ドクドクと、熱く粘っこい液体が、口内に流れ込む。少々早い、まあ最初はこんなものか。私は男の放った白濁液を口いっぱい溜め込みながら、舌先で液体が流れ出る「出口」をツンツンと刺激し、最後まで出し切るように促す。出きったところで私は口を肉棒から離し、零れないようにしながら軽く口を開け、中を男に見せる。それから私は喉を鳴らしてその白濁液をゴクリと飲み込む。

「んっ……あは、美味しい……」

僅かに口元からたれてしまっている液体を指ですくい、それを指ごとちゅパツと音を立て舐める。その様子をじつと見つめていた男、彼の一度は萎しなびたはずの肉棒が、熱さと堅さをもう取り戻している。私はそれをじつと見つめ、満面の笑みを浮かべ男の顔へと視線を移す。

「ね、お兄ちゃん。今度はこつちのお口で……ほら、お兄ちゃんの舐めてたら我慢出来なくなっちゃった」

小さな脚を懸命に広げ、私は秘所を男の前に晒す。そこはねっとり湿っており、私は指でその湿った秘所を更に押し広げ、よく男に見せた。虫を誘う為に蜜を出す花のように、私の秘所はすぐに愛液で溢れるように出来ている。

淫乱な幼女。人間ではあり得ないシチュエーションに、男は酔いしれている。誘われるままに男はふらふらと私に近づき、いきり起った熱棒を私の淫唇に押し当てる。

「ああ！ んっ、いい！」

一気に挿入される熱棒。男は入れた直後こそ腰を押し入れたまま動かなかったが、動き始めてからは、壊れた電動人形のようにひたすら腰を動かした。

その行為に、思いやりはない。男根をねじ込まれた膣はとても小さく、入れただけで破け壊れてしまいそうだった。それでも、ぐっと締め付けながら生暖かい感触を与える膣の快楽に我慢出来ず、ただ闇雲に腰を動かしている。

もちろん、私はそんな野獣と化した男の猛威を受け入れられる身体を持っている。むしろ私には、これほどに荒々しく腰を動かされた方が快楽を得やすい。ここまで、感情を高ぶらせるだけ高ぶらせた甲斐があったというもの。

「いつ、はっ、おにいっ、ちゃん……きもち、いい、いい！」

血走った目が、男に正気など失われている事を物語っている。深く激しく、腰を動かし続ける男。肩で息をしながら両腕で私の腰を抱え、更に奥へ奥へと突き入れようと必至になっっている。

「あっ、やつ、出てる……お兄ちゃんの出てる……」

不意に、熱い物が膣の奥へと流れ込んできた。あまりの激しさに、男は頂点に達しようとしていたことすら気付かなかったのか。腰の動きを止め、男は軽く呻いている。むろん、私は達していない。これで満足出来るはずがない。

「いやぁ、お兄ちゃん止めちゃ嫌ぁ」

私は下から、懸命に腰を振る。同時に、膣に力を込め男の肉棒を更に締めつける。今日はまだ二度も達した男だったが、すぐに男根は膣を内側から壊そうかという程に、一気に膨張を始め固くなった。

「今度はぁ、私がぁ、ああ！ うっ、上になるっ、からぁ！」

理性を失いながらも男は私の要求を理解したのか、後ろへと倒れ込み、繋がったままの私を腰の上に乗せた。

「はっ、あっ、あん、いつ、いい、いい、よぉ……おにいっ、ちゃん……あん！」

途切れ途切れに、私は快楽を言葉にする。何度も腰を男の腰に打ち付け、そそり起っている肉棒を奥へと突き当てようとす。

小さい私の身体に合わせ、膣の奥も浅い。それだけに男の肉棒は簡単に奥に届くばかりか、強く突き当たる。子宮に当たるその衝撃は、私にも男にも快楽へと変わる。

「どっ、おにいちゃ、ん……きもち、いい？」

気持ち良いはずだ。私には自身がある。案の定、男は硬骨の表情で譫言うたわごとのように「いい、いい」を繰り返すだけ。それしか言葉に出来ないでいる。

「嬉し……おにいちゃん、感じて、くれてる、んっ、い、んん、おにい、ちゃ、ん、もっ
と、もっ、突いて、突いてえ、ん、あん、んっ！」

もっともっと男を高ぶらせ、私はそこから快楽を得る。むろん演技はしているが、私も性的な悦楽を得て楽しんでいるのも事実。楽しめなければ、ここまでお膳立てした意味がない。

「ん、いつばい、出ちゃう……いやらしい、声、あん、出ちゃうよぉ」

さんざん演技で喘いできた私が今更言うのもおかしい話だ。しかしこれも本心で……演技ではない喘ぎ声が漏れ始めている。それを自覚している今、私は少し恥ずかしささえ感

じ、それがまた軽い快感になっていた。

ギシギシと鳴るベッドに負けぬ喘ぎ声。それを聞き男が興奮するのはもちろん、私も自ら発している声を聞き、自身の感情も高まってきていた。

「来る！ 今度、はっ、いっ、一緒、一緒、にい、ねっ、おに、おにいっ、ちゃん！ 来る、来ちゃう！」

軋むベッドが壊れるのではないか、そう思える程に激しく腰を打ち付け合う二人。トランポリンの上ではしゃぐ子供のように、私は男をまたぎ身体ごと動かし膣の中と相手の肉棒を擦らせる。すり切れるほどに熱く擦れ、その熱さが全身へと駆け上り悦楽へと切り替わる。

「来る！ 逝く！ いいっ、来ちゃう！ いいっ、あっ、あああ！！」

ドクドクと下から流れ込む液体。ヒクヒクと痙攣する肉棒から全てを吸い上げようと、私はキュツと膣を縮める。もたれかかるように、私は男の胸に顔を乗せる。

「はあ……気持ち良かったよ、お兄ちゃん……」

だが、私の甘えた声は男の耳に届いていなかった。激しい行為に、男はまさに精も根も尽きた様子。完全に気を失っていた。

無理もない。大抵の男はこのあたりで気を失う。よほど強靱な肉体と精神を持った男でも、私の手に掛かれれば後一、二回も出せば持たないはずだ。そうなるようにここまであれこれとお膳立てし異常なまでに興奮させてきたのだから。とはいえ、そのお膳立ても順調に事を運ぶための、簡単な下準備でしかない。精子の放出と共に「精気」を吸われているのだから。人間の男なら準備無しでも気絶くらいはする。

「……さてと」

私は身体を起こし、すぐさま男から離れた。

「もうちょっと楽しませてくれて良かったのに。まあいいわ」

私にとつての本番は、むしろこれからだから。それさえ満足させてくれるのなら、不満はない。

幼女の身体がみるみると人の形を崩していく。私は「もう一つの姿」に、今変わっている。長いクチバシと、羽毛に包まれた身体。腕は翼へと変わり、脚はより細くそしては虫類と同等の肌質へと変わる。

私は姿を、鳥に変えた。

こちらが本性、というわけではない。どちらも、私の姿。普段は幼女の姿で生活しているが、これから行うことをする時は鳥の姿になる。それだけの話。

モー・シヨボー。それが私の正体。

母国モンゴルでは「悪しき鳥」という意味。旅人を誘い、隙を突いて脳髓を啜る妖怪。モンゴルという地域や旅人というターゲットを、私は単に日本とそこに住む幼女趣味の男達に替えただけ。ただそれだけのこと。

固く長いクチバシで、私は軽く男の頭を突いた。すぐに起きる気配はない。

やるなら、今。

私は男の頭部に穴を開け、そこから脳髓を吸い尽くす。ここまでの経緯はこのための下準備。固い頭蓋骨も、私のクチバシなら簡単に穴を開けられる。私は狙いを定め、顔を上げクチバシをピッケルのように振り下ろす。

そう……するつもりだった。

「……止めた」

なんとなく、気が変わった。私は再び少女の姿に戻り、着ていた服を取りに脱衣場へ向かった。男の脳髓を吸い尽くせば、当然男は死亡し、この部屋は殺人事件の現場と化す。そうならば、当然人間達は騒ぎ始め、犯人である私を捜そうとするだろう。さすがに捕まることがないが、騒ぎが大きくなると「狩り」がし辛くなる。そうなったら場所を変えれば良いだけなのだが、それももう面倒くさい。

なにより……いや、特に言つことを聞く義理も何もないのだが……私に接触してきた「自称保護者」を名乗る男から「殺生は控えてくれ」と懇願こんがんされていたのを不意に思い出し、なんとなく、気がそがれた。今日はそれだけ。特に他意はないはず。

その保護者は、私に人間社会で生活する知恵と知識を与えてくれた。その義理は……全く無いと言い切るほど薄情なつもりはないけど……ただその彼が私に、「愛」を教えると懸命になっているのがちょっとウザイ。

「無理よ……」

長いこと、少なくとも少女の姿から察せられる年齢よりは長く、生きている。その中で、私は「愛」を知りたいとも思わなかったし、理解出来ると思ったこともない。色々この日本で生活するためのサポートをしていてくれるのには感謝しているが、だからといって、あの男の願いを聞き入れる必要は無く……ともかく、今日はもう脳髓を啜る気力が失われた。それだけ。

脳髓は単に好物であり、それを糧としているわけでもなく死活問題にならないというのも理由の一つではある。三回に分けて得た「精気」だけで、ひとまず事足りているし。

「でも、このまま帰るのもねえ……」

着替え終わった私は、乱雑に衣類が脱ぎ入れられている男のかごに手をかけた。そして中から、私は財布を丸ごと拝借した。

「搾り取るだけ搾り取ってあげるわ」

よもや、私のような幼い少女に財産を奪われるとは思いもしなかっただろう。しかし極上の快樂を与えてやったのだから、これくらいは当然の「見返り」だろう。と言っても、私に金銭はあまり必要ないのだが。

「んー……ちよつと物足りないかな。こいつヘタすぎ」

脳髓を吸ったとしても、満足出来ただろうか。私はまだうずく臍に軽く手を添えた。

「もう一人くらい行けるかな」

まだ夜は長い。私は狩り場の「ポイント」へと、戻っていった。